

# ワンだフルライフ！ 後期

猫ト みかん。

## 読書の秋

---

本が好きです。小説を読むことがやっぱり多いのですが、それ以外の本、新書とか、図鑑とか、歴史の本とか、エッセイとか、本であるならば、わりと雑食。なんでも好きです。

なので、秋に限らず読書は欠かせません。授業の間が一時間空くときや、放課後、よく図書館に入り浸っています。

大学に入って、何が楽しみだったかって、それは大きな図書館ですよ！ オープンキャンパスで初めて大学の図書館に入った時のあの胸の高鳴りを今でも鮮明に思い出せます。この本全部わたしのもの・・・！

足繁く図書館に通っていると、自分のお気に入りの席というものも出来たりします。わたしのお気に入りの席は、窓際の、学食が見える席です。見下ろせば噴水の広場も目に入ったりして、人の行き来も楽しめます。時間帯によっては西日が当たるのがたまに傷。でも、そんなところも馴染めばお気に入り要素の一つになってしまうのが、お気に入りのお気に入りたる所以です。

書架をめぐって、気になった本を何冊か抱え込みます。鉱石の図鑑、絵本、詩集、哲学の本、古典文学全集、、、。腕が重たくなったら、もういいかな、とお気に入りの席へ着きます。本を選んで胸に抱えている時の幸福感といたら、何ものにも代えがたいですね。本を読んでいるときよりも、もしかしたらこの時のほうが幸福をかみしめているかもしれせん。腕いっぱい抱えた、まだ読んだことのない本たち。

ああ、しかしまた本を積んで気の向いたところからぱらぱらとページを繰る幸福といたら・・・！ 本当に、どうしてわたしはこんなに本が好きなのでしょう。好きに理由はないって言い回しをよく聞きますけれど、大きく頷いて同意します。

それっぽい理由をつけることは出来ますけど（新しい知識を得る快感だとか、未知の世界が開けるときどきだとか、書いた人の思考に触れられる高揚感だとか）、どれも間違っていないのだけれど、びたっときません。ただ好きなんだ、というほうが、わたくし的には納得です。

幸せ、幸せ！ 日がな一日、本をめぐっていられたらなあって時々思います。働いて、今よりも広いお部屋に住めるようになったら、自分の書斎をもつのがわたしの小さな夢です。想像するだけで、うっとりです。なんて素敵なんでしょう！

閉館前をお知らせする放送が入ります。いつの間にか、外は真っ暗。木の葉を揺らす風が少し寒そうです。借りていく小さな本を何冊か選んで、わたしは帰り支度をします。心の中はほっこりあったかです。

## 長袖とジャケットとマフラー

---

季節の変わり目のこの時期、困ってしまうのは服装です。

寒くなるかな、と思って厚着をしていたら、太陽がさんさんと降り注いで暑ーい、と唸ることになったり、今日はお天気だしあったかいかな、と思ったら、日が落ちると急に涼しくなって、寒いっ、と腕を抱えたり。

「調節できる服装が良いよね」

みっちゃんは七分袖のシャツに、秋物のジャケット。

「動いたら暑くなるし、まだ半袖でいけるだろ」

しずかちゃんは厚手の半袖のシャツ一枚。

「この時期は風邪を引きやすいからね、あったかくしたほうがいいよ」

タマ先輩は長袖にジャケットを羽織って薄手のマフラーも巻いています。

この時期、服装に困るのはほんとに困るのですが、色々重ね着が楽しめるので、その点は持ち服の少ないわたしには嬉しい、貴重なお洒落季節です。

秋って、何でも似合いますよね。

ジャケット、カーディガン、ベスト、パーカー。

ワンピース、オーバーオール、ロングスカート。

ブーツ、ローファー、パンプス、スニーカー。

チェックにボーダー、無地に暖色、寒色。

冬になったら、もこもこにありっただけ着込まないといけないので、それまでの短いお洒落シーズンなのです。

「大学も制服だったら楽だったのになー」

とぼやいたのはなっちゃん先輩。

「うわ、似合わない……」

ぼそっと呟いたにっしー先輩は、なっちゃん先輩にヘッドロックをかけられていました。

高校生だった頃のみなさんも、見てみたいです。

ひゅるり、と風が吹くと、やっぱり寒い。

そんなわたくしの今日の服装は、長袖にカーディガン、秋物ストールです。

## ケーキバイキング

---

しずかちゃんがケーキバイキングに行きたいと言うので、みっちゃんを誘って三人で行くことになりました。大学の最寄駅から二駅向こうにある、近隣ではちょっと有名なケーキ屋さんです。

お店の前に行くと、女の人がすでにずらりと並んでいました。三十分待ちだそうです。

「夜ご飯の分まで食べるよ！」

わたしは気合充分です。午後を過ぎた時間ですが、昼食も抜いてきました。お腹もぐーぐーと臨戦態勢です。

「私はあまり、たくさんは食べられないかもしれないな」

みっちゃんは片手を頬に当てて言いました。

「大丈夫、みっちゃん分も俺が食べて元を取るからさ！」

しずかちゃん、それは違うんじゃないのー？

そんなこんなで三十分並びまして、試合開始のゴングが鳴り響きます。

時間は一時間。大きなお皿を片手に、ずらりとケーキが並んだところへ突撃です。

普通のケーキよりもちょっと小ぶりのケーキが色とりどりに並んでいます。眺めているだけでも、幸福な光景です。甘いものって、どうしてこんなに素敵なんでしょう。うっとり。

わたしが好きなのはチーズケーキ。とりあえず、レアチーズとスフレチーズの二種類はすかさずお皿に取りました。普段は好きなものは後に残しておくタイプですが、バイキングですからね、お腹に余裕のあるうちに、好きなものを食べておかななくては！

あとは一、何にしようかな。ショートケーキも食べておかななくちゃ。こっちの苺のムースも美味しそう。シュークリームが美味しいんだよってさっきしずかちゃんが言っていたしなあ。こっちは何だろう。あ、ミルフィーユだ。ミルフィーユも美味しいですよ。モンブランも食べたいけど、ちょっと重たそうだなあ。

目移りしながらとりあえず第一弾を取り終えて、席に戻ると、もうしずかちゃんもみっちゃんも戻っていました。

「そんなにいっぱい食べられる？」

みっちゃんがわたしの持ちかえった戦利品を見て、心配そうに言いました。

「まだまだ、戦いはこれからだよ、お嬢さん」

ニヒルな笑みにわたしは挑戦してみます。苦笑されました。

「しかし、俺には敵うまい。カボチャのタルト美味かったぞ。あ、ミルフィーユとかあった？」

「あったあった。カボチャのタルトか。それも食べなくちゃ」

体重のことは、今だけは忘れましょう。

## おめでた

---

アルバイト先のスーパーのチーフ、大嶋さんが妊娠していることを教えてくれました。

「ええっ、おめでとうございます！」

「ありがとう」

更衣室のロッカーの扉をぱたんと閉めた左手の薬指にきらりと光る指輪。幸福そうな微笑みは、もうすでに母親のような慈愛に満ちていました。

「今、何ヶ月ですか？」

「三ヶ月よ」

「へえ。お腹、まだあんまり目立たないですね」

「そうね、もう少ししたら、大きくなってくると思うけど」

「へええー」

思わず、じーっと大嶋さんのお腹を見つめてしまいます。ここに、もう一つの命が入っているなんて。正直に言えば、すごく不思議。自分もそうしてお母さんのお腹の中にいたことは知識としては知っているんですが、もちろん覚えてなんていないわけですから。

「触っても、大丈夫ですか？」

「良いけど、まだ動いたりはしないよ？」

可笑しそうに、大嶋さんは言いました。

「では、失礼して」

そっと、わたしは大嶋さんのお腹に触れました。大嶋さんの言う通り、まだ赤ちゃんの気配は分かりません。ああでも、何だかとても大切なものに触らせてもらったような、不思議で感動してしまいます。

「すごいなあ」

「ふふふ」

「元気に産まれてくるんだぞ」

大嶋さんの中の、もう一つの命に、声をかけました。

「お仕事はじゃあ・・・」

「うん、年内で辞める予定なの。お腹が目立ってきたら、レジにも出られないから、事務室内の仕事がメインになるけど」

「そうですか」

大嶋さんが辞めてしまわれるのは残念です。でも、元気なお子さんを産んで、素敵なお母さんになってくれることでしょう。

お腹にそっと手を重ねた大嶋さんは、まるで女神のように綺麗でした。

## 自転車

自転車は、わたしにはなくてはならない相棒です。銀色ボディの26インチ。黒い前かご。流線を描いたハンドルに、チリンとなるベル。ギアなし。防犯用にチェーンも買って、二重ロック仕様です。前輪のカバーの部分には、油性マジックで『宝野一子』と明記しています。一の字がぐにゃっと曲がってしまったことが、ちょっとばかり悔しいところ

です。  
今日は土曜日。授業は午前中で終わって、わたくし、ちょっぴり暇でした。天気は良好。空は手の届かないほどに高く、いわしの雲が気持ち良さそうに泳いでいます。

こんな日は、お散歩日和、自転車日和。

相棒と共に、わたしは出発しました。

こちらに引っ越してから、ご近所をよく自転車でうろうろしていましたが、まだ、通ったことのない道はたくさんあります。今日はちょっと、そういう通ったことのない道を行って、ご近所地図を開拓しようと決めました。

風を切って、ゆるやかに走ります。空気は澄んで、金木犀の香りがどこからか漂ってきました。その香りにつられるように、住宅街のほうへとハンドルをきります。

金木犀はすぐに見つけました。オレンジ色の可愛い花です。小さな駐車場に一本、枝を広げていました。深く息を吸い込みます。秋の匂いです。

駐車場の脇に、車が一台通れるくらいの狭い道があります。薄暗くて、ちょっぴり冒険の匂いです。小さく胸が震えました。背筋をしゃきんと伸ばします。ペダルをぐっと押しました。

一軒家の住宅が続いています。ベランダに干された洗濯物の向こうに青い空。犬の散歩をするおじいさんとすれ違いました。どこかの家から、子どもの声が聞こえます。玄関先の鉢植えに水をあげている奥様もいました。どこの家にも、どの人にも、日常がありました。その隙間を、ほんの少しだけ非日常気分のわたしが通り抜けます。鼻歌でも歌いたくなるような気持ちです。

「はっ！」

るるんと胸を踊らせていたわたくしですが、きゅっと手の平を握ってブレーキをかけました。

目の前に、急な下り坂が現れたのです。まるでジェットコースタのような下り坂です。道は真っ直ぐなのが、幸いといえるでしょうか。こくん、とわたしは息を呑みました。手の平に緊張の汗がにじみます。前方には、車も人もいません。後方もOK。

息を吸って、吐きました。

「ようし」

一瞬来た道に戻ろうかという選択が脳裏をよぎりましたが、ここで後ろにひいては冒険者の名がすたるといふもの。ええい、と思い切って地面を蹴りました。

きゃー——、と、心の中で大絶叫。

弱くブレーキを握りながら駆け下りました。一瞬、光速を体感したように思います。

一息に坂を降りきって、きゅっとブレーキをかけました。はあ、と止めていた息を吐き出します。心臓がどきどきしていました。ジェットコースタよりもスリルがあったのではないのでしょうか。

降りてきた坂を振り返って、その急勾配を見上げます。達成感を噛みしめて、にこりと微笑み

ました。勝利の笑みです。ふっふっふ。

さて、と前に向き直れば、見覚えのある大きな道路に通じていました。ああ、ここに出る道だったんだ、と脳内のご近所地図に新しい道が開通しました。

近くに喫茶店があったはず。ちょっとお茶でもして、帰りはまた違う道から帰りましょう。

## 仕送り

---

実家から、救援物資、もとい、仕送りのダンボールが届きました。

おばあちゃんから梨をたくさんもらったから送るね、というメールがきていたので、それでしょう。

アルバイトもしているし、家賃は払ってもらっているし、生活に困っているということはないのですが、やっぱりありがたいものです。ありがたや、ありがたや、と拝みつつ、ベリベリとガムテープをはがしました。

ぎゅうぎゅうときっちりのお弁当箱みたいに、綺麗に荷物が詰まっています。隙間に収まっているのは必ずタオル。それから、街頭でもらったようなポケットティッシュ。上のほうにはお菓子ののっていました。お煎餅が一袋、クッキーが一箱、誰かにもらったらしい水羊羹の缶詰が三つほど。スーパーの袋に入った梨がどっさり出てきました。一人で食べきるには多いなあ。同じく一人暮らしのしずかちゃんに分けてやろう。

それからそれから、ラップとアルミホイルが出てきます。必需品ですね、ありがたい。長持ちする乾燥わかめと乾燥ひじき、粉末のカップスープ。これは必ず仕送りのダンボールには入っています。

父より、と書かれた紙袋を発見しました。何だろう、と開くと、あたたかそうな厚手の靴下が三足。あはは、ありがとう。

もう一つ、ビニール袋がありました。こちらには、歯ブラシやスポンジ、それから何故か延長コード、乾電池、携帯会社のキーホルダなどなど。家で余っていないものも入れられたような気がします。かっこ笑い。

生活に必要なものが入っているのは、すごくありがたいし、嬉しいのですが、必要じゃないものも、こうして入れられていることのほうが、何だか嬉しさも倍増で、少しだけうっとうしくて、それよりもっと愛にあふれています。

さてさて、ありがとうって電話をかけましょうか。



## お買い物

---

今日はみっちゃんと女の子同士でお買い物です。

わたしはおニューのブーツを、みっちゃんはコートをお買い求めなのです。

一人でマイペースショッピングも楽しいものですが、気の合う友人とのお買い物もまた楽しいものです。

「似合うかな？」

「うん、似合う似合う」

「これ可愛いねえ」

「可愛い！ こっちのも良いかも」

お花が飛んじゃうような女の子っぽさじゃあないですか。えへへ！

こういう女の子っぽい気分を味わえるから、友だちとの買い物が楽しいのかもしれませんが。

いや、わたしだって歴とした女の子なのですけれど。

でも、そういう女の子っぽさが少し苦手でもあります。んー、何だろうな。照れちゃうのかも、そんな自分に。可愛い子ぶってる気がしちゃう、ということもあるなあ。

だけど、みっちゃんと一緒だとそういう苦手な気持ちにならないんです。どうしてだろう。

「いっちゃんの好きそうなもの発見」

みっちゃんがにこにこ手招きをします。

「なになに？ あ、葉だ。へえ、押し花」

「いっちゃんは自分で作ったりしないの？」

「してないけど、作ってみたいなあ。押し花とか良いねえ」

ああ、そっか。こういうところかも。みっちゃんだからかも。上っ面じゃない、友だちだからかも。

「みっちゃんは他にいきたいお店は？」

「そうね。そろそろお腹が空いたかも」

みっちゃんはお腹に手を当てて、ちょこんと首を傾げました。

「そうかも」

わたしもお腹に手を当てると、小さく虫が返事をしました。頃合のようです。

「どこにいこうか？」

「たこ焼き屋さんの割引券をしずかちゃんからせしめてきたの」

たこ焼き屋さんはしずかちゃんのバイト先です。

「森川君、アルバイト？」

「うーん、どうかな。いたらサービスしてもらおう」

「割引券ももらったのに、悪いわよ」

「わたしは悪い女なの」

「いっちゃんったら！」

えへへ！

## 台風

---

テレビのニュースをつけると、カッパを着たお兄さんがマイクを持って風に吹き飛ばされそうになりながら、中継をしていました。

危ないから、こういう中継はやめてほしいものだとは常々思いますが、そんなことより台風です。

テレビでは警報や注意報を告げるテロップが途切れなく流れています。風が窓ガラスを暴力的に叩きます。時折、塊のような雨がばしばしと窓を射撃するのでびくっとします。台風です。台風がやってきているのです。

わたしは窓の傍に立って、外を眺めました。殴りつけるような雨が隣の家の屋根を叩き、街路樹は根こそぎ飛んでいってしまうのではないかと心配になるほど幹をしならせています。

「わお」

英語発音ならばWow。

土砂災害や洪水の被害で大変なことになっている地域もあると知ってはいますが、台風はちょっとドキドキします。ずっと眺めていても飽きません。不謹慎でしょうか。不謹慎だからかもしれません。

しかし、これでは今日は外には出られませんね。何か食べるものはあったかしら、と現実的な心配も頭の片隅ではしています。ああ、ちょっとだけ大人になったな、と思う瞬間です。それは少しだけつまらないことで、少しだけ視野の広がったということ。

それにしても、すごい風です。アパートがまるごと吹っ飛んでしまったらどうでしょう。到着した先で、魔女を踏んづけていたら？ ああ、ドキドキします。

「明日は台風一過で、良い天気になるでしょう」

お天気キャスタのお姉さんが、機械的な声で告げました。

今はこんなものすごい雨風なのに、明日は晴れるんですって。天気図を見れば、確かに雲は日本列島を通り過ぎていきます。

あの渦を巻いている雲の下に、今わたしたちは居るわけです。宇宙から見れば、白い雲がゆったり流れているみたいに見えるのに、地上はこんな大嵐。ふうむ。何だか不思議です。科学的には不思議じゃないのでしょうかけれど、何だか何だか、不思議なのです。

そんなことをぼんやり考えている間にも、風はごうごう、雨はびゃーびゃー、大変な騒ぎです。

あったかい紅茶でも淹れようかな。お家の中は、雨も風も吹きません。あとはアパートごと吹き飛ばしてしまわないことを祈るばかりです。

森田くんとは、英語の授業が一緒です。

名前と顔が一致するくらいの知り合いで、特に話したこともなかったのですが、まあちょっと格好良いかな、ということと、英語の発音が上手いなあという印象をもっていたくらいです。同じ学科なので、他の授業でも時々顔を合わせるので、わたしのことも顔と名前くらいは知っているでしょう。わたしの印象は、分かりませんが。

なので、学食で森田くんを見かけたときも、「あ、森田君だ」と思っただけでした。

森田くんは昼食をとった後らしく、テーブルに空っぽの食器を置いたまま、音楽を聴きながら文庫本を読んでいます。器用なことをするなあと思いながら、わたしはどこに座ろうかな、と席を探していました。今日はたまたま一人なのです。お昼のピークを過ぎた時間で、学食は空いていました。好きな席を選びたい放題です。

「森田ー」

と、その時、森田くんがお友だちに呼ばれました。

「おう。待ってたよ」

森田くんはイヤホンを外して立ち上がると、文庫本をジーンズの後ろのポケットに突っ込みました。

その仕種を見た瞬間、わたしはラーメンを乗せたトレイを落としそうになりました。体を電撃が走る、というのはこういうときに使う表現なのでしょうか。

森田くんが立ち尽くすわたしに気がついて、目が合います。

「ども」

軽い調子で挨拶をしてくれます。

「はい」

わたしも軽く頷いて、ぎこちなく微笑みます。ほっぺたが熱くなってきました。顔が赤くなってたらどうしよう！　　というか、なんでわたしはラーメン持ってるの！

けれども森田くんは何も気にした風もなく、そのままお友だちと行ってしまいました。

わたしはその背中をじっと見送って、見つめすぎ！　と気がついて慌てて目を逸らしました。震動で、ラーメンのつゆが少しトレイに零れました。

「ああもう、何をしているのー」

もう何もかもが恥ずかしくなりながら、手近な席に着きました。

早く食べないと、ラーメンの麺がのびきってしまいます。本当にもう、何で今日に限ってラーメン・・・・・・・・。

甘いはずの乙女心が何だかしょっぱいです。

佐藤さん

---

「佐藤さん、可愛いよなあ」

しずかちゃんと言いました。

わたしとしずかちゃん、それからみっちゃん。それにしずかちゃんと仲良しの柴くんの四人でグループ課題を図書館でしています。

「名前も可愛い。甘い響きだよな、佐藤さん」

どこから突っ込んだら良いものか。とりあえず、わたしたちはしずかちゃんを放っておくことにしました。

わたしたちのいる二つ向こうの大机で佐藤さんたちのグループが課題をしています。佐藤さんは、短い髪にパーマをかけた、背の低い可愛らしい女の子です。しずかちゃんじゃあないけれど、砂糖菓子みたいなふわっと可愛い女の子だなあ、とわたしも思います。

「可愛い可愛い」

「はいはい。森川はこっちの資料を見て、必要なところ付箋貼ってな」

柴くんは慣れたものです。どーんとしずかちゃんの前に資料を置いて、自分は自分の作業を進めます。わたしもしずかちゃんのことなど放っておいて、自分の分担をしっかりとやりましょう。

「あ。森田くんだよ、いっちゃん」

みっちゃんに腕をつつかれて、わたしははっと顔を上げました。

森田くんが、友だちとぶらぶらと目の前を通り過ぎていきます。

「森田くん、格好いい。名前すら、格好いいよね」

両指を組み合わせ、乙女のポーズでわたくし。

「俺、森川なんだけど」

さっきまでうっとりしていたしずかちゃんが冷静に突っ込みました。

「全然違うよ、森田と森川じゃ」

「ほとんど変わんねえって。なあおい、誰かこのとんちきの目ん中のハートを払ってやれよ」

「いや、他人のこと言えないから、森川」

柴くんがずばっと言いました。

まったくですよ。

## あたたかい飲みもの

---

朝晩以外も大分肌寒くなってきました。秋も深まってきたようです。足元で落ち葉は乾いた音を立て、頬を切る風は冷たく、吐く息はミルクのように真っ白。秋です、秋です。もう冬の足音も聞こえてきそうです。

涼しいというには涼しすぎるけれど、まだ背を丸めるほどに寒くはなくて、見上げたくなる青い空に向かって、ぐんと背筋も伸びる、気持ちの良い季節です。

夏の炭酸飲料や柑橘系のさっぱりしたジュースも好きですが、寒くなってきた季節に飲む、あたたかい飲みものも大好きです。

朝はティーバッグで紅茶を淹れます。あたたかい湯気をふう、と吸い込むと、ほう、とばたばたしていた朝に一息つけます。余裕のあるお休みの朝は、牛乳をあたたためてミルクティーにしたり、ジャムを落としてロシアンティーを気取ってみたり。紅茶はお腹からあたたまる、安心する飲みものです。

午後の一服はホットコーヒー無糖ブラック。紙コップの自販機で購入します。とっても熱いので、最初の一口は、火傷をしないように慎重に。

「ブラックなんて大人ねえ」

カフェオレ派のみっちゃんが感心したように言います。

「気合だよ、気合」

午後の授業でうとうと舟をこがないように、カフェインを摂取なのです。苦さと熱さで内側から気合の炎をごうっと焚くのです。

夜はホットココア。お湯で溶かした粉末ココアにあたためた牛乳を注いで完成です。マグカップに両手を伸ばします。じわじわっと指先から熱が伝わります。鼻先に甘い湯気。ホットココアのこの瞬間が、たまらなく幸せです。あたたかくて、甘くて、美味しい、三拍子。身も心もほっこりです。

体があたたまると心もあたたまるのです。だから、お風呂とかお布団とかもぬくぬくで幸せでしょう？ あたたかい飲みものも、同じです。あたたかい幸せが味わえるのは、秋冬ならではです。そう考えると、これからやってくる厳しい寒さも、どんと来い、という気持ちになれます。

あ、でも、手加減してくれるなら、歓迎します。ディア、冬の将軍さま。

芸術の秋！ というわけでもないのですが、展覧会のチケットをもらったので、ちょっと芸術を嗜みに参りました。

かの有名な、えーと、モネの展覧会です。クロード・モネ。睡蓮の絵は、何となくどこかで目にした記憶があるようなないような。

チケットをくれたのは、みっちゃん。

「知り合いにもらったんだけど、もし良かったら」

ここで一緒に行こうと言わないところが、みっちゃんとわたしの気の合うところかもしれません。美術館とか博物館とか映画館には、一人で行きたいわたしたちです。感想を分け合わず、胸に抱えて独り占めしたいわたしたちなのです。

美術に関する知識は、残念ながら、あまり蓄えていません。たまには美術館とかも良いかなあという軽い気持ちで自転車を駆りました。

天気は上々。綺麗な青に、筆で刷いたような白い雲。まるで絵画のような空です。

美術館に着くと、駐輪場に自転車を止めました。小さなリュックからチケットを出して握りしめ、入り口に向かいます。入り口の大きな看板には睡蓮の絵がありました。そうそうこれこれ、チケットの絵と同じです。おそらく、これが目玉なのでしょう。

平日の昼間にも関わらず、人がたくさんいました。わたしのように何となく来た人もいれば、どうしても観たくて来た人もいるでしょう。とにかく、たくさんの人です。わたしは前の人の歩みに合わせて一点一点の絵をとっくりと眺めながら、感動していました。

このモネという人は、もう生きてはいない人です。けれども、彼の描いた絵はまだこうして生きていて、たくさんの人に愛されているのです。逆に、もうわたしたちは彼本人には会うことは叶わないけれど、彼の描いた絵はこうして目にすることができるのです。

描かれた絵の美しさのため息を吐きながら、わたしはそんなことに感動を覚えていました。

小説が書かれ読まれるのは、人生が一度であることへの抗議からだと思えます、と言った方がありました。今この時しか、わたしたちは生きることができません。しかし、こうして過去に触れ、未来へ何かを残していくということは、ささやかな『時』への抗議なのかもしれません。

それにしても、モネの絵は素晴らしかったです。図録も買ってしまいましたが、やはり本物は生々しいですね。筆使いから息遣いまで感じられるようです。人の頭越しにでも、目前に見たいという気持ちも分かりますね。

## さらば愛しき人

---

わたしとしずかちゃんは同じ講義を終えて、さて昼食でも取ろうか、と一緒に教室を出たところでした。

「あ、森川くんだ」

「あ、佐藤さんだ」

お互い語尾にハートマークをつけて、憧れの君の名前を口にします。

瞳にハートマークを浮かべて、麗しの君の姿を追っていましたが、思わずその目をぱちくりと瞬いてしまいました。

ちらり、とわたしとしずかちゃんは横目で視線を合わせてから、もう一度視線を同じ方向へ向けます。

そこには、仲睦まじく微笑みながら会話をしている森川さんと佐藤さんが・・・。

「ああー、二人、仲良かったんだねえ」

「そうみたいだなあ。まあ俺とワン子もこうしてよくつるんでるわけだし」

「そ、そうだよね！」

「だろ？ ははは」

台詞は棒読みです。

講義終了直後の人波がはけて、二人の姿がよく見えるようになりました。それはもう、握り合った手まではっきりと。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

わたしとしずかちゃんの背後に、どんがらがっしゃーん、と雷が落ちました。

よろり、としずかちゃんがバランスを崩して、額を押さえます。わたしも、腰の力が抜けて、へたり、と隣りの壁に手をつきました。

「現実って残酷だ」

「甘くないね。ほんとに、容赦ないよ」

ははは、とわたしとしずかちゃんの口から、魂の抜けた乾いた笑いが洩れました。

こんなところで泣けないし、笑うしかないでしょう。

ぐう、とどちらからともなく代わりにお腹が鳴いてくれます。

「こんな時に、デリカシーがないな。そんなだから彼氏がないんだろ」

「他人のこと言えないでしょう、しずかちゃん」

悲しいけれど、ため息一つでしっかり立ち直ります。

「やけ食いだ。から揚げカレーだ。大盛りにもしてもらおうぜ」

「おう」

わたしは漢らしく応え、しずかちゃんと拳を打ち合わせました。

## こたつマジック

---

おコタを出しました。出した、といっても狭いお部屋ですので、コタツのテーブルは常に出ています。小さなわが家の食卓兼勉強机です。コタツ布団を出した、というのが正確なところでしよう。

おコタの魔力は日本人ならば、多くの方がご存知かと思われます。

ぬくぬくの呪いです。一度捕らえられたら最後、そこから抜け出すことは容易ではありません

。

「洗濯物を入れないとなー」

びゅーびゅーと北風に吹かれて凍えているベランダの洗濯物を眺めて呟きます。ああ、外は何て寒そうなのでしょう。それに引き換え、おコタの中のぬくぬくなこと……。

「あと、3分したら取り込もう」

うんうん、と頷いて、わたしはぬくぬくの幸せに浸ります。こっくりこっくりとそのまま夢の案内人に何度もお辞儀をして、かくーん、とノックダウン。

おコタはまた、周囲に物を引き寄せる力も持っています。

「読みかけてた本はどこにやったかな」

おコタから、あちこちと手を伸ばします。発見しました。

「えーと、英語の宿題が出てたんだった。辞書、辞書」

なんなく発見です。

「小腹が空いたな。何かないかな」

お煎餅の袋が出てきました。

まるで小さな要塞です。冬将軍の攻撃に耐える籠城です。

窓が北風にかたかたと揺れます。裸になった枝がとっても寒そうです。

それに引き換え、おコタのぬくぬくなこと……！

と、インターホンが響きました。

「宝野さーん、お届け物でーす」

「はいー」

おコタから手を伸ばして印鑑を取りましたが、玄関は手を伸ばしても届きません。

このままおコタを背負ってずるずると移動したいようですが、そうもいきません。仕方なく、おコタから出ました。

「宝野さーん」

「はいー」

ぱたぱたと急いで玄関を開けます。ぴゅるりと吹き込む北風。

ううっ、寒い！ ぶるぶる！



コートを着て、マフラーをぐるぐると巻いて、耳あてを装着。手袋をはめて、靴下は二枚履き。背中とポケットにはホッカイロ。わたくしの、冬の重装備です。

それでも、玄関のドアを開けた瞬間には、ぶるぶると背筋に寒気が走ります。かき氷を食べたときみたいな、きーンとした冷たさです。

「さーむーい〜」

思わず呟くと、白い息がほわほわと生まれました。

白い息って、何だか嬉しくなってしまう。はぁーっとわたしは息を吐いて、白い雲を生み出しました。少しだけ、神さまに近づいた気分です。わたしの雲は、すぐに空中に溶けて消えてしまいました。

道行く人もみんな暖かい格好をしています。体が2倍くらいの厚みになるような上着を着た人、毛糸の帽子をかぶった人、もこもこのブーツを履いた人。寒いですよねえ、と心の中で相槌を打って、灰色の空の下、わたしも道行く人に加わります。

瞳の奥を突き抜けるような冷たい空気。鼻先とほっぺたがすぐに冷え冷えになりました。

「うう、寒い」

寒いとどうして独り言が洩れてしまうのか。

はぁ、寒い寒い。

猫背になりかけてた背をしゃきっと伸ばしました。木枯らしを正面から受けて立ちます。

ひゃあ、寒い。

けれども、空気はとても澄んでいるような気がして、胸の内まで、すっと透きとおるような心地よさがあります。きん、とした冷たさも、身が引き締まるようです。

寒さにはめっぽう弱いわたくしですが、冬は四季の中で一番好きかもしれません。

スクールバスの停留所で、マフラーに顎を埋めて、コートに両手を突っ込んでいるしずかちゃんを発見しました。

「おはよう。寒いねえ」

「おっす。寒いなあ」

冬のこの、「寒いね」の会話がとっても好きなわたくしです。

水曜日は、三時間目と五時間目の授業をわたしは選択しています。四時間目の一時間（授業は九十分ですから、この場合は九十分）、間が空いてしまうわけです。

そんな時は大抵、図書館に入り浸るわたくしですが、その日はわたくし、ちょっぴりお腹が空いていました。学食の二階のパン屋さんに行こうかな、と思いつきました。新しく、ココアパンが売られるようになったという情報を思い出して、わたしのお腹が元気よく賛同を示します。

そう、冬を乗り切るためには、多少の脂肪も必要です。わたしは足早に学食の二階に向かいました。

パン屋さんは空いていました。お昼も終わった時間帯ですし、学生もまばらです。

だがしかし、ココアパンは売り切れてしまっていました。やはり人気なのでしょう。無念です。わたしは仕方なく、チョココルネを一つ買いました。カロリーなら匹敵しているはずです。

紙コップの自販機でホットコーヒーも買って、適当に空いている椅子に座ります。ぬくぬくと指先をあっためてほっこり。幸せな気持ちでチョココルネにかぶりつきます。寒い日には甘いものですよね。

にこにこ、わたしはご機嫌だったのですが、斜め向かいのテーブルに目がいった途端、その笑顔も凍りつきました。

あれは、わたしが食べたかったココアパンじゃありませんか！

レポート用紙をテーブルいっぱい広げながらそれを食べているのは、一人の男子学生でした。

レポートがココアの粉で汚れちゃうんじゃないかしら、と多少恨みのこもった目で見つめると、その男子学生が顔を上げました。

あ。

目が合います。どこかで見た顔です。

向こうもそう思ったのか、微妙な顔をして軽く頭を下げると、再びレポートに向かいました。

誰だったかな。何かの授業で一緒なだけかもしれないけれど。

わたしもその時はそれ以上気にはかけずに、ココアパンからは目を逸らし、おいしいチョココルネを頬張ることに専念しました。

彼の正体は、大学の授業を終えた後、バイト先で判明しました。

「いらっしゃいませ。あ！」

「あ」

思わず、お客さん相手に相応しくない声を上げると、彼のほうも、気がついて気まずそうに口を開けました。

何を隠そう、彼はわたしのバイト先のスーパーの常連さんだったのです。

次の水曜日、ほんのわずかの期待と好奇心をもって、再び学食の二階へ上がりました。きょろきょろとラウンジを見回しますが、先日のココアパンの人は見かけません。ちょっとだけがつかりして、わたしは仕方なく、ココアパンを購入しました。リベンジです。最後の一個でした。少し得した気分ですね。

先週と同じ席に座ったところで、電話が震えました。

「おっと」

メールが届いたみたい。食べる前に返信しちゃおうと片手でいじっていると、正面の椅子が引かれて、誰かが腰を下ろしました。

「あ」

「ども」

ココアパンの人です。わたしは書きかけのメールを閉じて、電話を鞆にしまいました。なぜだかちょっと緊張してしまいます。

「邪魔だった？」

「ううん、平気」

「別に、何でもないんだけど、来たらたまたま見かけたから」

「そっか」

う。沈黙が降ります。どうしたらいいんでしょう。

「ココアパン」

「え？」

「狙ってたのに。君に取られた」

その言い方が、子どもみたいだったので、わたしは思わず笑ってしまいました。

「先週は、あなたに取られたんだから、おあいこだよ」

「ああ、それで睨まれてたのか」

「睨んでないよ！ ちょっと見てただけ」

「いいや、睨んでたよ。ちょっと怖かったもん、俺」

まあ、失礼な！ ええと、ええと、ああ、罵ろうにもまだ彼の名前も訊いていませんでした。

「わたし、宝野一子」

名乗るときはまず自分から。

「俺はね」

くす、と彼は笑って、手帳から一枚白い紙を破くと、『一二三』と書きました。

「いちに、さん？」

「はずれ。もっと工夫して読んで」

ダメだしをされました。うーん、何だろう。

「わんつー、すりー？」

「何で英語」

『一二三』君は大爆笑です。笑ってもらえて良かったですけど、何もそんなに笑わなくても。

「ひふみ、だよ。一二三比呂」

笑いすぎて涙目になった一二三君は、ようやく笑いを納めたあとに「よろしく」と言いました

。

少しだけ、来週の水曜日が楽しみです。

## 電話

---

「もしもし、お母さん？」

「ああやっと電話をかけてきたんだ。もう、こっちからかけないと全然かけないんだから」

「便りが無いのは無事な証拠」

「まったくもう。元気なの？ 風邪とか引いてない？」

「元気元気。風邪も引いてないよ」

「そう？ 流行ってるから、手洗いうがいをちゃんとしてね。ご飯はちゃんと食べてる？ 今日は何食べたの？」

「食べてるよ。今日はね、えーっと、オムライスにしたの」

「オムライスなんて作れるの、あんた」

「作れるよう、失敬な」

「ははは、それは失礼。お金は、足りてる？ アルバイトはどう？」

「うん、大丈夫。バイトも楽しいよ、わたしのレジ打ちの素早さを見せてあげたいね。それで、年末のことだけど」

「ああ、はいはい。いつ帰ってくる？」

「28日くらいかなあ」

「そう、待ってるからね。ちょっと待って、お父さんが隣りでそわそわしてるから、代わるね」

「はいはい」

「もしもし、お父さんだよ」

「はい、一子さんですよ」

「ははは。元気？」

「元気元気よ。ふふふ」

「風邪が流行ってるからねえ、手洗いうがいが一番らしいからね」

「うん。さっきお母さんにも言われた」

「あそう？ ご飯はちゃんと食べてる？ 今日は何食べた？」

「それもさっきお母さんに訊かれた。オムライス」

「あはは、そう？ 嫌だねえ、お母さんがみんな先に聞いちゃって。オムライス、美味しそうだねえ、すごいじゃん」

「ふふふ。お金は足りてるし、アルバイトも順調だよ」

「ああ、訊こうとしてた。ははは」

「28日くらいに、そっち帰るから」

「うん、気をつけて帰っておいでね」

「はい」

「返事は伸ばさない」

「はい」

「じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみなさい」



# 眠れない夜

---

寝返りを打つ。

午前二時。丑三つ時という奴です。

わたくし、基本的に夜は苦手です、それというのも夜は九時就寝という小中学生の頃に培われた親の教育の賜物なわけですが。えーと、つまり、わたしがこんな時間まで起きているなんてことは滅多にないわけなのです。

夜は大体十二時前にはお布団の中です。で、三十分くらいお布団の中で本を読んで、ほどよく眠くなったところで、おやすみ一、となるのですが、どうしたわけか、今夜はすでに午前二時を時計の針がさしています。

「うーん」

悩ましげに唸って、わたしはまた寝返りを打ちました。

ぱっちり目が冴えてしまっています。睡魔はどこへ行ってしまったのでしょうか。

「明日は一限から授業があるんだし、早く寝ないと」

とにかく目をつぶってじっとしてみます。

・・・・・・・・眠れません。

ああ、そうだ。羊を数えるのが、こういう時の王道ですね。

羊が一匹、羊が二匹・・・何で羊なんでしょう。もこもこして、気持ち良さそうだからでしょうか。羊毛布団とかありますよね。羊毛ってウールのことでしたっけ。そうでしたよね、確か。辞書で確かめてみましょうか。ああでも、ここで起き上がってはますます眠れなくなりそうです。というか、羊は何匹でしたっけ。

駄目ですね。向いてないみたいです。何か他に眠くなる良い方法はないでしょうか。いつもはどうして、すぐに眠れていたのでしょうか。気がついたら、夢の中で、朝には目覚ましで起きるのです。眠る瞬間というのはあるはずなのに、それがいつだったのか、まったく分かりません。

いつもは寝ている時間をすっかり過ぎて、体は疲れと眠気を訴えています、頭だけが妙に冴えていて、なかなか眠ってくれません。

時刻は午前三時になってしまいました。もう、このまま起きていたほうが、寝坊の心配はないような気がします。そうしようかな、授業中に寝ちゃうかもしれないけど。

ため息と同時に、欠伸。

そうです、眠たいはずなのに。

まあいいや。眠れないなら、それなりに時間を有効活用しよう。えーと、えーと、そうだ、演習の授業で発表の課題が出ていたはず。テーマは何だったかなあ。簡単なのにしたいけど、それだと他の人とかぶって資料の争奪戦になるかもだし、かといってとっつきにくいテーマだと、わたしが書くのが難しいしなあ・・・。

携帯のアラームで、わたしはがばりと布団から起き上がりました。

「えっ！？ 今、何時？」

ぐっすり眠りすぎました！ ああ、いつの間に眠っていたのでしょうか。摩訶不思議！

## 鍋パーティ

---

街猫研究会の面々で、忘年会も兼ねて、鍋パーティをすることになりました。

場所は、タマ先輩の下宿です。なっちゃん先輩はご自宅から大きな土鍋を、にっしー先輩はカセットコンロを持ってきてくださいました。わたしとみっちゃんはスーパーで一緒に野菜やお肉を買い込みます。

「白菜と、しめじと、葱と、春菊は嫌いな人がいるかなあ」

「お豆腐は？」

「お豆腐も！ しめは何がいいかなあ。うどんにする？ ラーメンにする？ タマ先輩のところに炊いたご飯とかあるかな」

みんなのお財布と好物を相談しながら、材料を集めていきます。

ちなみに、タマ先輩は冷蔵庫でビールを冷やす係です。

みんなが揃って、お鍋も良い具合にくつつつしてきたところで、タマ先輩の冷やしてくれたビールで乾杯です。

「ええー、今年も残すところあと、十日くらいとなりました。可愛い一年生が二人も入ってくれたことで、うちのサークルも何とかつぶれずに済んだし、わりと良い一年だったんじゃないかなと思います」

なっちゃん先輩が先輩らしい口上を述べます。

「なっちゃん先輩の内定も決まったしね」

タマ先輩が鍋の様子を見ながら言いました。

そうなのです。なっちゃん先輩はついに内定が決まり、今日はそのお祝いも兼ねていました。

「はっはっは。まあね。内定っていうか、先輩が勤めてる文化センターの臨時職員なんだけどね。面白い企画を色々してるみたいだし、楽しみかな」

少し頬を赤くして、なっちゃん先輩がにこりと微笑みました。まだビールに口はつけていなかったもので、酔った赤さではないでしょう。

「卒業できなかった、っていうオチがつかないといいね」

「にっしーは盛り下げること言わない！」

何にせよ、みんなで囲むお鍋は身も心もあたたまる美味しさです。

「美味しいねえ」

「宝野さん、片山さんも、のんびりしてるとにっしー先輩に肉を全部攫われるよ？」

それはいけません！ お肉！



## こたつでみかん

---

実家にはこたつというものがなくて、ですから、一人暮らしを始めたら、絶対こたつで暮らすんだ、と固く決意をしていたわたくしです。

憧れのこたつにぬくぬくと浸って、幸せオーラ全開ですが、こたつの醍醐味、憧れのシチュエーションはここからです。

「うふふ」

思わず怪しい笑みを洩らしながら、取り出したるはみかんの袋。

何かこう、竹編みのかごとかを用意しておけば良かったな。惜しい惜しい。

こたつでみかん、はわたしの長年の憧れのシチュエーションでした。ああ、まさか実現できる時がくるなんて！

これで外が雪景色で、隣りに猫がいれば完璧なのですけど、その憧れは、おばあちゃんになるときまでとっておくことにしましょう。

この憧れの風景は、おそらくテレビか漫画の刷り込みだと思われるのですが、どうしてこんなに憧れちゃっているのかは、わたしもよく分かりません。

日本的な風景にそそられるのでしょうか。そうかもしれません。ああ、そうかこれが風情というものなのではないでしょうか。

お寺の庭だったり、山の紅葉だったり、夜桜とか、月見酒とか。

そういった、ほっとため息が出るような、じんわりと心がぬくまるような、情緒ある趣です。

こたつにみかん、は自宅でそんな情緒が味わえる素敵な時間だから、こんなに憧れていたのかもしれません。

類似の憧れに、縁側で膝の上に猫、というものがありますが、それもまた、おばあちゃんの楽しみにとっておくことにいたしましょう。

さてでは、みかんをいただくかな。

「う。すっばい」

まだちょっと若かったみたいです。

## ホールケーキ

---

スーパーでレジをしていると、一二三君がやって来ました。

「いらっしゃいませ」

知り合いが相手だと、ちょっと照れくさいですね。

「クリスマスなのに、バイト？」

「恋人はサンタクロースなので」

「ははは、何それ」

一二三君のお買い物はホールケーキがまるまる一個に、シャンメリーが一本でした。

「クリスマスパーティ？」

「そうそう。一人で寂しくクリスマスパーティなのだよ」

お財布からお金を出しながら、一二三君が言います。

「えっ、これ一人で食べるの？」

「憧れない？ ホールケーキ一人で一個食べんの」

「ああー、それは確かに」

憧れます。包丁で切り分けずに、そのままフォークで食べるんですよ。

「じゃ。バイトがんばれ」

「じゃあね。ありがとうございました」

営業スマイルでわたしは一二三君を見送りました。

夜になって、わたしが部屋で慎ましく一切れのチーズケーキをいただいていると、電話がメールの受信をお知らせしてきました。

一二三君からです。

『ギブアップだ(´△`;)』

写メが添付されています。

開いてみると、半分ほど削られたホールケーキの写真が。大変無残な有様です。

『もうちょっと頑張ろうよ!』

『いやムリ。俺がケーキになる』

『ははは(^▽^)]

『人の不幸を笑うな!』

『わたしはチーズケーキ食べたよ。美味しかったよ』

『もう、ケーキの話はやめてくれ』

『ははは(^▽^)]

『・・・明日、学校に持ってくるから。あと半分はお前のノルマな』

『いや、お断りします』

『お前に拒否権はない。じゃ、メリークリスマス☆』

とんだメリークリスマスです。カレンダーを見ると、明日は木曜日でした。

「今夜は雪になるかもしれません」

と、お天気キャスタのおじさまが言いました。

冬は毎日寒いですが、今日の寒さはまた格別です。外はまるで冷凍庫のよう。歩く人はみな、首を縮めて背を丸めています。

部屋は暖房をつけて暖かくしていますが、窓の傍に立つと、肌を刺すような外の空気がびんびんと伝わってくるようでした。すぐにもこたつにUターンしたいところですが、曇ったガラスを指先でぬぐって、暗い夜空を見上げます。

「まだ降って、ないかなあ」

よく見えません。思い切って窓を開けてみました。

「さむっ」

頬を切る寒さとはまさにこのこと。ああ、でもこの寒さでしたら、雪も期待できるのではないのでしょうか。目をこらしてみますが、やはりまだ降り始めてはいないようです。

「寒い寒い」

わたしは顔を引っ込めるとぴたりと窓を閉めて、こたつに戻りました。こういう日の、こたつはまた格別にぬくぬくです。

インターネットで天気を調べてみました。小さな雪マーク。降るところがあるかもしれません。という曖昧な文句。

うーん。降るかなあ、降らないかなあ。

子どもの頃は、雪が降るのがただただ楽しみでした。

けれども今は、明日はアルバイトがあるから、あんまり積もっちゃうと嫌だなあとか思ってしまいます。雪の日に出かけるのなんて億劫です。しかしその一方で、降らないかな、まだ降らないのかな、とそわそわ浮き立つ心もあります。

子どもの時みたいに、純粹じゃなくなった、と嘆く方もいますが、でも、子どもの頃のそのわくわくした純粋な気持ちを忘れたわけではないし、少し大人になって、他のことが見えるようになったのは、そうですね、気持ちの良いものだと思います。子供の頃、肩車をしてもらって、いつもより高く遠くが見渡せるようになった時みたいに。

夢中で雪遊びをしていたわたしを、お母さんはしもやけの心配をして、手袋を出してくれました。今は、自分の心配は自分でしなくてははいけません。たぶんそれが、億劫なのでしょうね。でもそれが、自立ということかもしれません。

外はどうか。雪は降り始めたかしら。

わたしはまたいそいそとこたつを抜け出して、カーテンの隙間から窓の外を見上げました。

## ふたたび帰省

---

年末になりました。新幹線で、わたしは再び実家へ帰ります。

今年ももう終わりなのですね。

振り返ってみれば、穏やかながら、なかなか充実した一年だったのではないのでしょうか。

初めての一人暮らし。料理も少し覚えたり、アイロンがけも出来るようになりました。寂しかった部屋も、今は大分物も増えて、居心地の良い、わたしのお部屋です。

素敵な隣人さんとも、顔を合わせれば笑顔で挨拶を交わせる仲になりましたし、来年は、おかげの交換が出来るくらい、親睦を深めたいものです。

新しい友だちもたくさんできました。大学へ通うのは楽しみです。同じ学科を志して来た仲間でもありますから、趣味や気が合うのも、とても嬉しい。

サークル活動もとても楽しいです。猫が好き、というのももちろんありますが、先輩と身近にお話できることのほうが大きいです。数年でも、やはり人生の先輩です。

初体験のアルバイトもとても勉強になっています。社会で働くというのは、やはり大きな経験値です。こういう言い方は語弊がありますが、働いている人もやっぱり人間なんだな、と思いました。たとえばコンビニのレジのお姉さんだったり、銀行の受付のお姉さん、郵便を配達してくれるお兄さん、バスの運転手さん……。今まではレジの人とか銀行の人、郵便屋さんに運転手さん、と団体的な目線でしか見ていなかった人が、ちゃんと個人として見れるようになりました。この人は笑顔が素敵だな、とか、うるさいお客さん相手に丁寧に対応されていてすごいな、とか、台風でも雪でもお仕事で大変だな、とか、今日は鼻歌とか歌って機嫌が良さそうだな、とか。

終わってみれば、あっという間の一年。

振り返ってみれば、案外長い一年だったようにも思います。

新幹線の窓から、雪化粧した富士山が見えました。

来年はどんな一年になるのでしょうか。願わくば、良い一年でありますように。

それでは、よいお年を。